

日本の伝統・文化を継承する若者たち

# 明日への扉

Door to Tomorrow



Yosuke Higuchi

1980年福岡県生まれ。美術教師を目指して入った福岡教育大学で、鋳型をつくる鋳金を専攻したことがきっかけとなり芦屋釜の復元に関心を抱く。現在は芦屋町が運営する工房で日夜修業に励む。



芦屋釜(あしやがま)

鋳型に最適な土が採れることから、かつて鋳物業が発展した、福岡県遠賀郡芦屋町でつくられた茶の湯釜。国の重要文化財に指定されている茶の湯釜は9口、そのうち8口が芦屋釜である。

日本の伝統・文化を継承する若者たちを紹介する映像ドキュメンタリー「明日への扉」をぜひご覧ください。

MOVIE WebやTVなどでお楽しみいただけます。

Web版  
パソコンやタブレットでもご覧になれます。本紙掲載以外に、多数の若者たちをご紹介します。

アットホーム明日への扉 検索



TV番組  
ディスカバーチャンネル(CS)  
冠番組  
「アットホーム presents 明日への扉」放映中  
毎週金曜日 22:53~23:00



ビジョン  
ANA国際線「SKY CHANNEL」にて放映中

NEW!! 最新号のご案内 好評公開中

No.061 / 山鹿灯籠製作後継者 中村 潤弥 氏

## 芦屋鋳物師

樋口陽介氏

幻の釜を再び世に送るために、自らの人生を賭ける。

今からおおよそ650年前に、筑前国の芦屋(現・福岡県遠賀郡芦屋町)で茶の湯釜として生まれた芦屋釜。その表面に施された、日本古来の模様や風景などの美しさが評判となり、京の貴族や武士たちに愛用された。しかし1551年、時の大名・大内義隆の死をきっかけに釜づくりは衰退し、やがて消滅する。

それから400年以上もの歳月を経た1995年、芦屋釜の研究と製作を行う「芦屋釜の里」が建てられ、名工や研究者の協力の下、芦屋釜の復元と芦屋鋳物師の復興の可能性が探られてきた。樋口陽介さんはその意思を継ぎ、幻の釜を再び世に送ることに情熱を燃やす若き職人だ。

きっかけは？

樋口「学生時代に専攻した鋳金(ちゅうきん)が縁となり、この世界に入りました。復元や復

興という難問にチャレンジすることに、とても大きな魅力を感じたんです」

重厚な印象とは裏腹に、芦屋釜は薄くつくられている。現代の製法では、釜の厚さは3㎝が限界とされるが、芦屋釜のそれは最も薄い部分で約2㎝。1㎝の差によつて釜はおよそ1kgも軽くなり、当然、茶席での使い勝手が良くなる。

極限の薄さを可能にしたのが「挽き中子」という製法。中子と外型という二つの鋳型を合わせてできた隙間に溶かした鉄を流し込む、主に釣鐘に用いられる鋳造法だ。鉄には数百年の使用にも耐える、極めて純度が高く、さびにくい鉄「和鉄」が使われる。

樋口さん自身も何度か取り組むうちに、このつくり方は通常よりも手間がかかる上、失敗する確率も高いことが分かった。先人が難しい技をあえて選んだ理由には、美への飽くなき探究もあつたと考えている。挽き中子で鋳

造すると、釜の中まで美しく仕上がるのだ。模様を施す表面だけでなく、見えない内側にも神経を注ぐ。完全な復元を志すためにも、大切に受け継ぎたいこだわりのだ。

今の気持ちは？

樋口「毎日が困難の連続ですが、心が折れることはありません。腕を上げたいという気持ちのほうが強いんでしょうね」

400年を超える空白の時間を思えば、復元への道のりはまだ始まったばかり。今、全力を尽くして得た失敗の全てが未来への架け橋となる。明日への扉を開け、また一歩、夢に近づく。

※2012年7月取材。掲載内容は取材当時のものです。

MOVIE MORE!!  
幻の釜の復元に挑む姿を動画で詳しくご紹介しています。ぜひご覧ください。